

ヨーロッパの博物館を訪ねて

赤羽久忠

はじめに

昨年12月、約二週間の日程で全国科学博物館協議会主催の「欧州科学系博物館視察研修旅行」に参加し、イギリス・ドイツ・ベルギー・フランス各国の代表的な科学系博物館を訪問・見学してきました。今回はその概要を報告したいと思います。

外国といえば、数年前韓国へ二度程行ったことがあるだけで、ヨーロッパ・アメリカ方面はあこがれつつも今まで訪れる機会がなく、大きな期待とともにかなりの不安もありました。しかし、「案ずるよりは生むが易し」とはよく言ったもので、大きなトラブルもなく全行程を終了することができました。全科協の海外科学系博物館視察研修旅行は、ヨーロッパと北米を毎年交互に視察しているようですが、参加希望者も年々増加し、全国の博物館や展示業者が公務で、または私費で、20名を越える参加がありました。

言葉の問題については、パック旅行でしたし、みんなで一緒に行く限り、全く不安はありませんでした。ただし、フリータイムに夕食に出たり、大英自然史博物館やベルギー王立自然史博物館で専門の学芸員に仕事部屋などを案内していただいた時は、通訳をしてくれる人がいませんでしたので、大変苦労しました。それなりに泥縄式の勉強

はして行ったつもりでしたが。

世話館である国立科学博物館の選定した博物館が各訪問国を代表するような一級の博物館ばかりでしたので、富山市科学文化センターのような地方都市の少し小さな博物館の活動の見学ができなかったことは少し残念に思っています。

激動のヨーロッパを訪ねて

ヨーロッパはまさに激動の時で、10月3日に東西のドイツが統合された直後で、初めはドイツについては不確定の部分が多く、予定通り訪問できるかどうか心配でしたが、何とか初期の予定どおり行くことができました。貨幣の統合や賃金の格差、旧東ベルリンでの失業の続出など混乱の続く中での訪問でした。東西のベルリンを分けたブランデンブルグ門やベルリンの壁のあった場所に作られた壁を乗り越えようとして銃殺された人々の碑、そこに添えられた花束、建物の壁には無数の弾丸の跡が残り、まだ残っている東西を分けた壁にはペンキで様々なパフォーマンスが描かれていました。壁のかけらやソ連軍の兵士の使っていた帽子・ベルトを販売していたり、道路に捨てられたポンコツ車をみるにつけ、かつてテレビで観た映像と重ねあわせて、感動を覚えました。



図1 東西のベルリンを分けたブランデンブルグ門にて（女神の像は修理中であった）



図2 ベルリンの壁を乗り越えて、銃殺された人の碑と献花



図3 今も残る一部の“壁”には、様々な趣向を
懲らした主張が描かれている

訪れた博物館は桁^{けた}違いのスケール

選定された博物館のリストから考えて当然のこととはいえ、今回訪れたヨーロッパの博物館のスケールの大きさには圧倒されました。

大英自然史博物館は、1881年大英博物館より自然史関係が独立して以来、110年の歴史があるということですが、動物・昆虫・古生物・鉱物・植物の5部門で、現在収蔵標本は、5,500万点、職員数は約750名ということでした。年間の予算は、約3,600万ポンド(≒92億円余り)、入館者数は年間約160万人、専門職としては250名、researcher(研究員)、curator(学芸員)という二つの職種の区別がありました。このふたつの正確な違いは、よくわかりませんでした。展示や普及の仕事をする人達は別にいるので、主な仕事は資料の収集と調査研究で、ともに似たような仕事をしているということでした。いつも3~4つの特別展が開かれていました。

こういった傾向はドイツ博物館やフランス自然史博物館などでも同様で、日本の大きな博物館と



図4 人体に関する特別展の1コーナー



図5 フランス国立自然史博物館の一角。

比べても予算や職員数、敷地面積や展示面積が一桁も二桁も大きなものでした。

すべて見せるー大胆な展示

大英自然史博物館では人体に関する特別展が行われていました。そこで人間の「性」と赤ちゃんの誕生に関する展示が非常に分かりやすく、模型や図解で説明されていました。そこでは日本だったら親が目丸くするような展示もありましたが、小中学生たちはメモをとりながらごく自然に学習していました。赤ちゃんがどうやって生れてくるのかを博物館で展示するのも悪くないと思いますが、このような展示は、日本ではまだためられるのではないかと思います。

また、ベルギー王立中央アフリカ博物館では、アフリカの自然における弱肉強食の世界を展示するため、かなり残酷な印象を与える展示がありました。いつかテレビで見た、アフリカの動物たちの弱肉強食の世界を自分の子供に見せるといった番組を思い出しました。こわいもの・見にくいも



図6 アフリカの自然における弱肉強食

のにフタをして、美しいもの・優しいものばかりをみせていると、本当の美しさ・本当の優しさがわからない、本当の美しさ・優しさは、その裏側を知っているから理解できるのだと言っていました。

これらの展示から、多少のショックを与えても、真実はキッチンと見せるというような態度を感じました。その方が心に残るし、訴える力もあるのかも知れません。

実物の迫力

一装置は実際に働いているところを見せるー
ベルギー王立自然史博物館は、1878年、ベルニサル炭鉱の地下300mで発見されたイグアノドン^{イグアノドン}の完全骨格標本10体の展示で有名な博物館です。たくさんの実物標本は、それだけで十分な迫力と説得力をもちます。

日本の場合、博物館に展示してある“骨格標本”は、ナウマン象・デスモスチルス・恐竜などほとんど90%がレプリカ（模型）です。最近、豊橋市立自然史博物館で、恐竜の実物骨格を展示したということで、話題になりました。最近、模型製作の技術が進歩して、ちょっと見ただけでは本物と模型の区別がつかないくらいになっていますが、やはり「これは本物です」といわれるとそれだけで迫力を感じます。

また、フンボルト大学自然史博物館では蜜蜂^{みつばち}のコーナーがあり、蜜蜂の飼育をしていました。4



図7 イグアノドンの完全骨格10体の展示

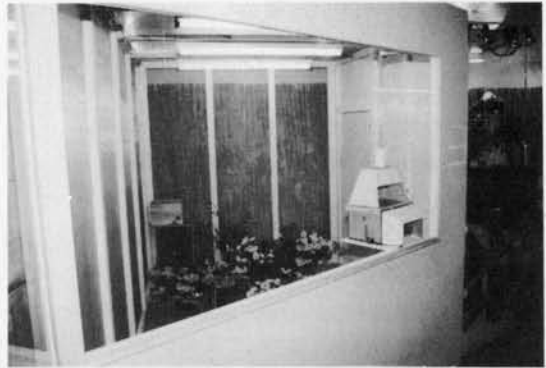


図8 蜜蜂の生態展示

畳半位の飼育室に蜜蜂の巣を置き、花や水（蜜？）などを置いて蜂が通っています。一瞬動物園に来たかと思うような生態展示は、従来の博物館の展示と違った新鮮な印象を受けました。

ドイツ博物館の場合は飛行機・ロケット・船・潜水艦・機関車など全て模型でなく、実際に使っていた物をそのまま展示していました。こういうことは、もちろんお金もかかるし、それよりも巨大な展示空間がなければできないことですが、ここでもやはり“実物”の迫力には圧倒されました。

また、古い展示物でも、動くものは動かせてあり、蒸気機関車などは時間を決めて展示解説員が説明をして車輪を回し汽笛を鳴らして運転していました。これは、非常に人気があり、たくさんの子供たちが集って歓声をあげていました。

また、水車のいくつかは、実際に水を流して水車を回転させていましたし、時計の展示ではほとんどすべての時計が動いていました。昔の装置なども、ただ配置するだけでなく、実際にそれを動かして見せる。これは、故障の問題などを考えると、ずいぶん大変なことだと思いますが、あえて

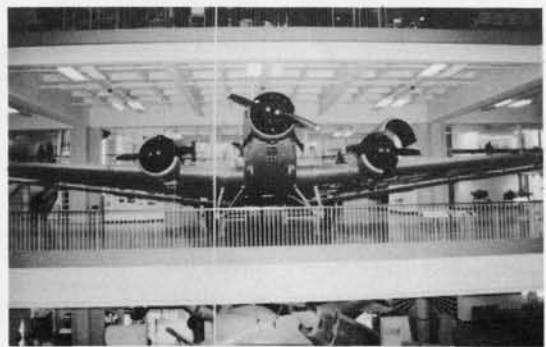


図9 古い飛行機の展示

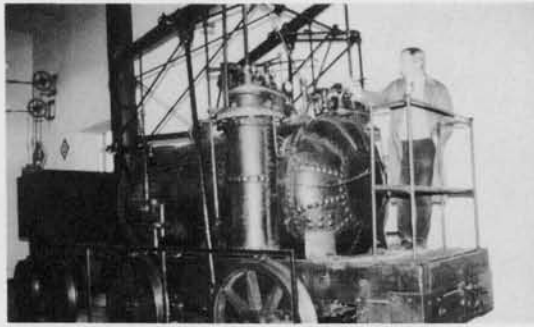


図10 機関車を動かして見せる係の人

それをやっているように見えました。

歴史と伝統・社会的コンセンサスに支えられた博物館の活動

今回訪問したヨーロッパの博物館は、その多くが重厚な建物に細かな彫刻を施してあり、古い歴史と伝統をもっています。そして、博物館ができた経緯も、まずたくさんの資料が集まることから始まったものが多いようです。

例えば大英博物館（大英自然史博物館を含む）は、1759年、世界初の国立博物館としてオープンしたということですが、もとはといえば創立者のハンス・スローン卿のコレクションの収蔵から始まったということです。

長い歴史と活動によって、市民や社会の中に博物館が深く根を下ろし、運営資金の一部を企業が負担したり、博物館の諸活動に市民のボランティアがごく自然に参加していました。

例えば、大英自然史博物館の全予算のうち、会社などからの寄付が約22.5%（21億円）もあるそうですし、ドイツ博物館もドイツ政府やミュンヘン市からの援助のほか、会社から展示物を提供し



図11 大英博物館の正面

てもらったり、企業からの協力を前提に博物館が成立しているようにみえました。

市民のボランティア活動は、どの博物館でも活発のようでした。これらは、全くの奉仕で、ボランティアの活動に対する博物館の方からの財政的支出はほとんどないということでした。

西欧の会社では、企業も個人もこのような「奉仕活動をする」ことに大きな価値を見出しているように思います。

公立の博物館の予算に最初から寄付金を組み込んでおいたり、博物館の活動に無料奉仕のボランティアを予定するなどは、「奉仕（活動をする）」という言葉にそれほど崇高な価値観を見出していない日本ではちょっと考えられないことのように思いました。日本とヨーロッパの博物館を取り巻く社会状況の大きな違いのように思います。

私が見てきたヨーロッパとヨーロッパの博物館の関係はそのまま日本にあてはまりませんが、今後富山市科学文化センターのいろいろな活動に生かしていきたいと思っています。

（あかはね ひさただ 専門学芸員）

雲仙普賢岳溶岩ドームの石と火山灰

雲仙火山の活動が始まったのは今からおよそ20数万年前で、記録に残る噴火は、1657年と1792年の二回あります。二回とも、今の溶岩ドームと同じ「かくせんせきあんざんがん角閃石安山岩」が溶岩となって流れ下りました。1972年の活動では、溶岩の流出以外に火山灰・噴石・地震も激しく、有名な眉山の大崩壊と引き続く津波で約15,000名の犠牲者がでました。

なお、この石と火山灰は移動ミニ博物館として貸出可能です（提供：鹿児島地方気象台上田義浩氏）

